

令和元年（2019年）7月22日

報道機関各位

令和元年度（2019年度）水産研究本部成果発表会について

地方独立行政法人北海道立総合研究機構の水産研究本部は7つの水産試験場で構成されています。水産研究本部が取り組んでいる研究の内容や成果を、道民の皆様に広くお知らせするために「令和元年度（2019年度）水産研究本部成果発表会」を開催します。入場は無料です。

◎日 時

令和元年（2019年）8月7日（水）10：00～16：00（9：30受け付け開始）

北海道立道民活動センター かでの2・7（札幌市中央区北2条西7丁目）
（口頭発表会場）1階 かでのホール
（ポスター会場）1階 展示ホール

◎主な発表

- ・ 海底のホタテガイを素早く数える
- ・ シジミの砂出しで一石三鳥！？
- ・ 来年のコウナゴ丼はいつ食べられる？
- ・ サケのサイズは小さくなった？
- ・ ラジコンボートで海藻が育ちやすい場所を探す

◎報道（取材）に当たってのお願い

道内関連企業をはじめ多くの皆さまにご参加いただけるよう、事前の報道により広く開催のご案内をいただきますとともに、当日の取材についてもよろしくお願いたします。

◎詳しくは、別添のチラシ、または下記URLをご覧ください。

<http://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/central/section/kikaku/R1seikahappyoukai.html>

詳しくはこちらへお問い合わせください。

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構（道総研）

水産研究本部 企画調整部 企画課（担当：主査（連携推進）佐々木）

電話 0135-23-8705 ※平日8:45～17:30 土・日・祝日・年末年始はお休みです。

令和元年度(2019年度)

水産研究本部成果発表会 のご案内

水産研究本部が取り組んでいる研究開発や研究成果を広く皆様に公開し、ご活用いただくために『水産研究本部成果発表会』を開催いたします。

多くの皆様にご来場いただきたくご案内申し上げます。



- 日時 令和元年(2019年) 8月7日(水)
10:00~16:00 (9:30 開場)
- 会場 かでのる2・7 かでのるホール/展示ホール
札幌市中央区北2条西7丁目
* 駐車場を用意していませんので、公共交通機関をご利用願います。
- プログラム

10:00~10:15	開会挨拶	
10:15~12:00	口頭発表	
12:00~13:30	ポスター発表	第1部
13:30~15:00	口頭発表	
15:05~16:00	ポスター発表	第2部

**参加
無料**

口頭発表

時間	発表課題名	発表者	発表概要
1 10:15 ～ 10:30	流水が接岸する海でホッキガイを育てるために ーホッキガイ簡易種苗生産技術および網走海域に適した中間育成技術の開発ー	栽培水産試験 研究主幹 高島 信一	網走海域のホッキガイ資源回復に、簡易種苗生産技術開発と流水下での中間育成技術の開発に取り組んだ。種苗生産では、市販餌料を用いることで、餌料培養に伴う設備と労力を削減し、既存の設備でも種苗の生産が可能となった。中間育成では、流水下でも生き残る稚貝サイズを明らかにし、基質を必要としない育成手法を開発した。本研究は網走漁業協同組合の受託研究として行った。
2 10:30 ～ 10:45	シジミには、ほどよい塩分が必要 ー網走湖のヤマトシジミと湖水環境の現状ー	さけます・内水面水産試験場 研究主幹 楠田 聡	シジミの主要生産地である網走湖は、淡水層の下に海水が流入・停滞した汽水湖である。近年、網走湖のシジミの資源量は減少し、大規模産卵もないことが明らかとなっている。環境調査を実施したところ、夏季に頻発する豪雨により淡水層の塩分が低下し、産卵に適した条件が整わないことが影響していた。淡水層へ塩分を供給してシジミの産卵を促すために、漁業者の要望を踏まえた河口堰の運用による湖内塩分環境の改善が必要である。
3 10:45 ～ 11:00	シジミの砂出しで一石三鳥！？ ー蓄養・流通技術によるヤマトシジミの高品質化ー	網走水産試験場 主査 佐藤 暁之	ヤマトシジミの喫食には砂出しが必須であるが、砂出しをするると貝が弱るとされており、砂出し済みヤマトシジミはほとんど流通していない。本研究では、ヤマトシジミの高品質流通のための出荷前蓄養条件と流通条件を検討し、効率的な砂出し方法、砂出し・流通過程での活力の維持および呈味性の向上の3つを全て満たす技術を確立した。本成果により、ヤマトシジミの高品質化によるブランド力向上が図られる。
4 11:00 ～ 11:15	海底のホタテガイを素早く数える ー画像解析を利用したホタテガイ判別ー	網走水産試験場 主任主査 栗原 康裕	地まきホタテガイ漁場の状況を把握するため、海底画像撮影技術と画像解析技術を融合させた漁場可視化技術を開発した。本技術により、海底のホタテガイを自動判別・計数することで、正確かつ迅速な資源量推定が可能となった。今後は民間企業によるWEBサービスを利用することで、生産現場が主体となった運用可能な技術として普及を図る。
5 11:15 ～ 11:30	ラジコンボートで海藻が育ちやすい場所を探す ー健康食品素材候補アカバギンナンソウの生育に適した環境条件の解明ー	中央水産試験場 主査 福田 裕毅	未利用の海藻を健康食品などに活用する研究において、アカバギンナンソウの育成に適した環境条件を明らかにした。本種の分布は岩礁域で浅いため、有人船による調査は危険が伴う。そこで調査用ラジコンボートを製作し、生育場所の地形や分布状況を調べ、地形データを用いて流動シミュレーションを行った。その結果、アカバギンナンソウの育成適地は、きわめて浅いが干潮でも露出せず、波が当たりにくい場所であることがわかった。
6 11:30 ～ 11:45	水産物の安全と漁場環境を監視する ー有害有毒プランクトンブルームの長期変動ー	中央水産試験場 主任主査 嶋田 宏	貝毒は有毒プランクトンを食べた二枚貝等が毒化する現象である。麻痺性貝毒は1980年代に噴火湾を中心に大規模発生したが、1992年以降小康状態にある。一方、有害赤潮はプランクトンの集積による着色現象のうち魚介類の斃死を伴うものを指し、2015年に函館湾で初めて発生した。海洋温暖化を背景として、北日本においても貝毒に加えて有害赤潮の監視が重要となりつつある。

口頭発表

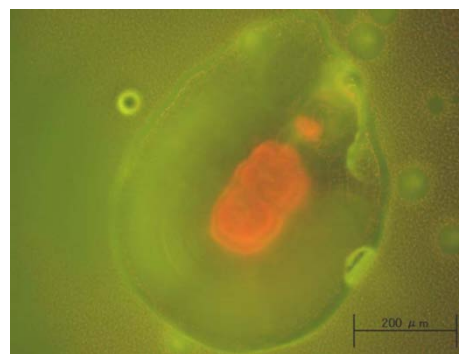
時間	発表課題名	発表者	発表概要
7 11:45 ～ 12:00	乾燥ナマコのイボ立ちを評価する方法 －画像解析による乾燥ナマコのイボ立ち評価－	中央水産試験場 専門研究員 成田 正直	乾燥ナマコにおいて、突起の形状いわゆるイボ立ちは重要な品質基準となっている。しかし、その評価は判定者の主観によるところが大きい。このため、画像解析を用いてイボ立ちの数値化を試みた。その結果、体長、周長、楕円周長を組み合わせた数値を用いることにより、イボ立ちの客観的な評価が可能となった。
8 13:30 ～ 13:45	来年のコウナゴ井はいつ食べられる？ －コウナゴの漁況予測技術の開発－	中央水産試験場 主任主査 三原 栄次	イカナゴ仔稚魚は、後志管内における春の主要な漁獲対象資源であり、天日干しによって「ちりめん小女子（こうなご）」などに加工されている。漁業者や加工業者のコウナゴの漁模様への関心は高く、精度の高い漁況予測が求められている。道総研水産試験場では水温観測、漁期前の採集調査、漁期中の漁獲物調査の情報を統合して、初漁日・盛漁期・終漁期を予測する手法を開発し、速報として関係機関に提供している。
9 13:45 ～ 14:00	すくすく育て☆シシヤモの赤ちゃん －シシヤモ仔稚魚飼育技術の開発－	栽培水産試験場 研究主任 岡田 のぞみ	北海道にのみ分布するシシヤモは、重要な漁業資源として調査研究が進められている。本研究では野外調査からは得られないシシヤモの生態的知見を得るために、仔稚魚の飼育手法の確立に取り組んだ。飼育水については植物プランクトンの添加が、生物餌料については栄養強化剤の添加が必要であった。加えて、その添加条件を明らかにした。また、ふ化仔魚は、海水温が14℃以下であれば水温変化に対して高い耐性があることが分かった。
10 14:00 ～ 14:15	健康なマツカワの放流に向けて －マツカワのウイルス性神経壊死症(VNN)の受精卵消毒の基礎研究－	さけます・内水面水産試験場 主査 伊藤 慎悟	2013年にマツカワ稚魚でウイルス性神経壊死症が発生し、放流尾数の減少を余儀なくされた。予防には、電解海水による受精卵消毒技術が利用できるが、マツカワ受精卵はショックに弱く、大量に処理できなかった。そこで、消毒効果と受精卵への影響を調べた結果、0.28～0.91mg/Lの有効塩素濃度で15分間の消毒処理により、受精卵へ深刻な影響を与えずにウイルスを99%以上不活化できることが明らかとなった。
11 14:15 ～ 14:30	サケ科魚類に発生するウイルス病の撲滅を目指して －ギンザケに新たに発生した疾病の原因究明と防疫対策の取り組み－	さけます・内水面水産試験場 研究職員 勝又 義友	北海道の養殖ギンザケに新しい疾病が発生し、この疾病の原因究明を行うとともに防疫対策を検討した。本研究により、この疾病がサケ科魚ヘルペスウイルス病と呼ばれるウイルス病であることが判明し、死亡魚から分離したウイルスはギンザケに加えサケに対しても病原性を持つことが明らかとなった。また本疾病の拡大を防ぐためには、受精卵の表面をヨード剤で消毒し、親から子への感染を防止する方法が効果的であることが示された。
12 14:30 ～ 14:45	母なる川にこだわらない生き方 －カラフトマスの母川回帰性と回帰率－	さけます・内水面水産試験場 主査 虎尾 充	カラフトマスは母川回帰性を持ちながらも、広範囲の迷入があるとされる。本研究では標識放流調査によって母川回帰性と回帰率を検討した。母川回帰性は奇数・偶数年級群で異なり、放流場所も影響すると考えられた。また、根室海区での標識魚の回帰率は最大0.3%程度と推定されたが、根室海区で放流された標識魚がオホーツク海区でも多数発見されており、カラフトマス放流魚が広域的に回帰し利用されていることが明らかとなった。

口頭発表

時間	発表課題名	発表者	発表概要
13 14:45 ～ 15:00	サケのサイズは小さくなった？ 一鱗を用いたサケの年齢査定と成長解析	さけます・内水面水産試験場 研究職員 中村 太朗	2018年における北海道の秋サケは来遊数が一昨年から回復に転じた一方で、サイズの小型化が顕著であった。サケの成熟年齢は主に3～6年で、一般的に高齢魚ほどサイズは大きい。2018年は5年魚の不漁と4年魚の豊漁が重なり、若齢魚の割合が極端に高くなった事が小型化の要因の一つと考えられる。さらに鱗相解析からサケの成長履歴を推定した結果、平成30年に来遊したサケは回帰直前に成長停滞が起きていた事が明らかとなった。

ポスター発表（1部 12:00～13:30 2部 15:05～16:00）

- ✓ 全ての口頭発表者が、ポスターでも詳しく研究成果を説明します。
- ✓ 研究員と1対1の交流です。ご意見・ご質問に丁寧に対応します。
- ✓ 口頭発表を聞き逃しても、ポスター発表で説明を聞くことができます。
- ✓ お忙しい方には、短い時間で研究成果を知るために、関心のある口頭発表とポスター発表を組み合わせる参加方法をお勧めします。



ALCで標識したカガトヌの耳石

●お申込方法

- ・電子メールあるいはFAXにてお申込下さい。
- ・電子メールによるお申込は、所属・企業、職・氏名（ふりがな）、住所、電話番号、メールアドレスを記載し、次のアドレスに送信して下さい。なお、申込用紙はホームページからもダウンロードできます。

●お問い合わせ・お申し込み先

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
水産研究本部 企画調整部
TEL: 0135-23-8705
FAX: 0135-23-8720
E-mail: gouda-hiroo@hro.or.jp

お申込締切日
8月1日(木)